

## 結婚を通じた現代ウズベキスタン女性の「目指すべき女性像」の変容

<https://doi.org/10.5281/zenodo.15570395>

松本 涼 Ryo MATSUMOTO

筑波大学 人文社会ビジネス科学学術院

人文社会科学研究国際公共政策学位プログラム

学士（言語・文化）博士前期課程一年

**Abstract.** *The aim of this study is to elucidate the processes occurring in modern Uzbekistani society—such as shifts in values and the reproduction of gender norms—by analyzing how women show initiative in the context of the life event of marriage and, in turn, how the ideal image of women is changing. This analysis employs the Trajectory Equifinality Approach (TEA). To this end, interviews were conducted with one married woman and one divorced woman. The Trajectory Equifinality Model (TEM) was utilized to visualize the progression of actions and events, while the Three Layers Model of Genesis (TLMG) was applied to illustrate the transformation of values. The results reveal that contemporary women strive to assert their own initiative, although they remain influenced by social norms and familial expectations. Moreover, the study highlights that women shape their ideal views of work and autonomy through key life stages, such as marriage and divorce. These results suggest that, for contemporary Uzbekistani women, the pursuit of personal interests and the establishment of a career have become newly recognized and socially valued norms.*

**Keyword.** *gender, women's initiative, patriarchy, social change, the Trajectory Equifinality Approach.*

### 背景と目的

現代ウズベキスタン女性の人生の中で、就学・就業や結婚はいまだ根強い社会規範や性規範に制約されている。そのため、それらを決めていく過程において女性の主体性、つまり女性が自分自身の人生に対し決定権を持つと能動的に考え行動する試みは、依然として表出されにくい。現代に向かう社会的・経済的な変化に伴い社会規範・性規範も変化しているが、その変化は必ずしも一方向ではなく、女性の主体性は促進と抑制という双方向の動きの中に置かれている。

女性の主体性の促進に関して以下の社会的・経済的な変化が挙げられる。男性の国外への出稼ぎの増加や消費文化の浸透によって女性の社会進出が進み、行動範囲や手段、就業機会が拡大したこと<sup>1,2</sup>や、携帯電話やスマートフォンの普及により、結婚相手の自由な選定や、嫁の立場の向上が可能になったこと<sup>3,4</sup>などである。さらに労働移民の経験を通じて伝統的な規範への見直しも生じている<sup>5</sup>。また核家族・拡大家族いずれにおいても、親族同士で家事や育児を分担し、その負担を軽減させることが可能である<sup>6,7</sup>。

一方で主体性の抑制に関して、まず強い性規範ゆえそれを逸脱する女性への暴力やゴシップが発生している<sup>1,8</sup>。また、独立後に進展した拡大家族主義は家父長制的性格を有し、その中では特に若い女性の自由は失われている。性役割や社会秩序に対し多くの女性は疑問すら抱かず、抵抗する者は少ない。結婚相手に関しても、両親が決める例が依然として一般的である<sup>5,9</sup>。女性の高等教育は、将来の子どもの教育費の節約や経済的な貢献が期待できるため、良い嫁の条件という面で評価されることがある<sup>6,10</sup>。その一方で、独立後の国家の教育の有料化や、高等教育を受けたことが嫁からの夫に対する要求が高まることにつながるという懸念から、女性の高等教育は軽視されて結婚が優先されることもある<sup>11</sup>。

またこうした社会において、離婚した女性は一層厳しい状況にある。ウズベキスタンでは宗教婚と法律婚の二重制度があり、宗教婚のみの女性は離婚時に法的保護を受けにくい<sup>12</sup>。他方で法律婚なら財産分与や給付金の受給が可能だが、支援はマハツラ<sup>1</sup>を通じて行われるため、離婚した女性やシングルマザーのような社会的スティグマのある女性は十分な支援を得られないことがある<sup>13</sup>。またマハツラは家庭問題に介入するものの、離婚率の低下を重視し、ドメスティック・バイオレンスに対しても和解を勧める程度に留まることが多い<sup>14</sup>。

このような社会環境の中で、女性がどのような価値観を持って生活しているかについて、制度面からではなく女性の主体的な語りや実際の生活の様子から分析する研究も存在する。例えば Kamp は、仕事をする女性が自身のことを労働者と自認しているものの、家計を支えるためではなく自分の成長や人生の豊かさのために働いていることを明らかにしている<sup>15</sup>。また宗野は、女性が家の外に出て働くことで、おしゃべりを楽しんだり愚痴をこぼしたりする機会を得ており、単に労働が収入源としてではなく社会規範への対応策として機能していることを指摘している<sup>16</sup>。そして山名田は、進学や留学を希望する女性が、男女の不平等や結婚を急かす母親といった困難に対し、無理に肯定したり従順であるように見せかけたりしつつ希望進路の実現を模索する様子を示している<sup>17</sup>。

これらの先行研究では、仕事や学業など現在時点での生活に対する女性自身の見解について深く焦点が当てられているが、人生全体を通して本人たちが理想とする「目指すべき女性像」がどのように変化したか、またその変化における社会的影響は何か、という通時的な視座はあまり持たれていない。社会的な「あるべき女性像」の変容や性規範の再生産という現在ウズベキスタン社会で生じていることのプロセスを明らかにするためには、社会と個々人の人生経路を結び付けて、それを社会的文脈に位置づけることが必要となる。特に結婚は、ウズベキスタン社会において女性が社会的に要求される重要な人生儀礼である。

このような背景を踏まえ、本研究では女性の主体性が結婚の前後においてどのように表出され、またその結果として女性自身が理想として思い描く「目指すべき女性像」がどのように変容したのかにつ

<sup>1</sup> マハツラとは居住地区は居住地区に基づくコミュニティであり、域内の問題や対立に対応し、地域を安定的かつ自律的に管理することをめざした仕組みである<sup>14</sup>。

いて明らかにすることを目的とし、インタビュー調査に基づく人生経路の分析を行った。さらに社会的な「あるべき女性像」とのつながりについて考察を行った。

## 対象と方法

本研究では、行動や出来事の変遷や価値の変容に着目するため、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) を用いて分析を行った。TEA は、複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM)、歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting: HSI)<sup>2</sup>、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) を統合・統括する考え方であり、文化と共にある人間の人生を構造ではなく過程に着目して理解しようというアプローチである<sup>18</sup>。

まず TEM と TLMG に基づく図を作成し、人生経路の可視化や変容メカニズムの理解を試みた。TEM とは「人間の発達や人生経路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデル」である。個人の行動や選択として現れる等至点、複数の経路が発生する分岐点、多くの人が経験する必須通過点などという各点を、非可逆的時間を軸に図として描写する。TEM は一般化や抽象化を目指しておらず、個別事象への理解や考察を目的に用いられる<sup>19,20</sup>。TLMG とは、人が環境から情報を選択的に取り入れる際の内的変容を三層で図示するモデルである。第一層の個人活動レベルは実際の行為をしている状態、第二層の記号レベルは人が情報を取り入れ、過去の経験とすりあわせている状態、第三層の信念・価値観レベルは信念・価値観が大きく変わる状態をそれぞれ示す。変化した信念・価値観は周囲に外在化される。このモデルによって、分岐点における変容メカニズムの検討が可能になる<sup>18,21</sup>。

サンプリング方法は HSI を参考に、結婚経験のある女性と離婚経験のある女性を対象とした。本研究の関心である結婚あるいは離婚は TEM において等至点ではなく必須通過点に該当するが、結婚および離婚の後に到達する点を最終的な等至点と捉えることで、HSI を応用した。その他の条件は、ウズベキスタンの都市部に在住する女性で、高等教育を受けたあるいは受けている者とした。このような選定基準を設けた理由は、生活様式や経済状況、教育水準などあらゆる面で、社会的価値観の変容による影響を強く受けている層に該当すると推測したためである。今回の研究では、本研究に協力を得られた者から結婚経験のある女性と離婚経験のある女性をそれぞれ 1 名ずつ対象として選定した。

対象者 (表) には、2025 年 1 月に 1~2 時間程度の半構造化インタビューを行った。使用言語は日本語・英語・ウズベク語である。その際に調査目的を説明し、研究参加、匿名化、録音について

<sup>2</sup> 研究者が関心を持っている等至点的なイベントを実際に経験している人々を調査の対象として選定し、話を聞くという手続きのこと<sup>18</sup>。

同意を得た。その後、対象者のインタビューで得られた情報を元にそれぞれ TEM と TLMG に基づく図を作成し、人生経路の可視化や変容メカニズムの理解を試みた。

## 結果

A さんと B さんのそれぞれに TEM 図（図 1、図 2）と TLMG 図（図 3、図 4）を作成した。

A さんは、11 歳の時に弟が生まれ、それを機に両親からの世話を満足に受けられなくなった。この時期以降「インディペンデント」になり、勉強や仕事に対する意識が強まった。その後 13 歳の時に日本語の勉強を始めたが、ここには日本に住む親族や日本語学校を運営する親族がいたことが社会的助勢（Social Guidance, SG）<sup>3</sup>として働いた。続いて 15 歳の時に化粧品を売り始めた。ここには、「他の人のお金を使わず、自分で頑張って自分のお金を使いなさい」という両親の教えが SG として機能している。

その後、A さんは日本語を勉強のできる高校・大学に進学した。A さんが在学していた約 10 年前の時点では女性の高等教育の価値は今よりも低く考えられていた<sup>4</sup>が、A さんは大学を卒業すべきものとして考えており、また日本語学習への熱意も高かったため、進学を決意した。在学中は化粧品販売に加え、菓子や手芸品の製造・販売といった副業にも携わった。また国外留学を望みそのための事前試験に 3 回も合格したが、両親の反対という社会的方向づけ（Social Direction, SD）<sup>5</sup>によって叶わなかった。両親の主張には「日本は地震が多くて危ない」という異国への不安感の他、「ウズベク人の女の子が他の国に行くのは良くない」、「結婚した後に夫と一緒に行くのであれば良い」という性規範も含まれた。A さんはこれに対し「両親は厳しすぎる」と評価している。また両親は A さんが 20 歳を過ぎた頃からお見合いの話を何度も持ってくるようになったが、A さんは「自身が卒業してから、大学を卒業した男性と結婚する」と主張して断り続けた。

卒業後、お見合い相手の中から気に入った男性を選んで結婚をした。その時には既に日本語教師として就職していたものの、夫の反対という SD によって退職した。出産後は専業主婦として生活しており、義両親と同居しているものの家事・育児は全て一人でこなしている。義母は家事を手伝ってくれず、また要求する水準も高い。このため A さんは炊事の際に出来合いのものを活用せず、麺やパイも生地から作っている。ただ仕事を諦めてはおらず、一番下の子どもが幼稚園に通い始めるようになった昨年、ウズベク語・日本語の個人レッスンと、衣類や化粧品の販売を開始した。日本へ行くことも諦めていないが、夫に「自分は行かない、日本語は分からない」と断られてしまうという SD があり、いまだ達成されていない。また仕事で稼いだお金で昨年自動車を購入し、現在は自動車学校にも通っている。

<sup>3</sup> 等至点へ向かうありようを促進したり助けたりする力<sup>20</sup>。

<sup>4</sup> 2023 年に高等教育機関を卒業した女性の割合は 46%に上るが、2015 年では 37%であり、その絶対数は 2023 年の約 3 割であった<sup>22</sup>。

<sup>5</sup> 個人の行動や選択に制約的な影響を及ぼす社会的な力であり、等至点へ向かうありようを阻害する力として働く<sup>20</sup>。

A さんにとっては、独身時代は「インディペンデント」であったが、今はなんでもまず夫に聞く必要があり、自分で自由な決断はできないと感じている。ただ、夫の助けを得ながら二人で協力して生活をしているという認識も持っている。A さんにとっての「目指すべき女性像」は「大学を卒業していて頭が良く、容姿に優れ、掃除もできて料理もできて仕立てもできる、子どもの世話や教育も全て行う、ユニバーサルな人」とあり、A さんは自身をそれに「110%」当てはまると評価した。今後についても日本語学校やブランドショップの開業、更にもう一人子供を産むことなど、忙しく制約も多い中でやりたいことを色々と思い浮かべていた。

B さんは幼少期に両親が離婚したため、親族の家を転々とする子供時代を送った。その後叔母の家に落ち着き、大学進学もその家で決定した。B さんは高校時代に新型コロナウイルスの影響によるロックダウンを経験しており、そのことで学業を継続するかどうか再検討する必要に迫られた。しかし叔母をはじめ周辺の親族が皆教員であり彼女に進学を勧めたこと、国立大学であれば両親のいない B さんは奨学金の受給ができることなどが SG として機能し、進学を決めた。

進学後、本人は望まなかったものの叔母と相手方の強い希望で結婚した。結婚に際し、叔母もマハツも夫となる男性についてよく知らなかったものの、その母親が良い人物であるからという理由でそれを推進したという。しかし夫は仕事をせず母親に頼りきりの人物であり、義理の家族も彼女と合わなかったため、B さんは離婚を決意した。叔母など親族には「離婚した後どのように生きていくつもりなのか」と大反対され、実際に結婚以降親族からの支援は減少していたものの、結婚生活で精神的に疲弊した彼女は反対を押し切って離婚した。しかしこの離婚手続きの際、夫である男性は「お金がない」などと言って身分事項登録部に出頭しなかったため、いまだ法律上は結婚状態にあるとのことである。

その後、B さんは教員である親族らの勧めという SG によって、学業の傍ら教員として学校で働き始める。元々教育の仕事には関心がなかったものの、本来目指したかった警察官には健康上の理由でなれないと分かっており、また周囲からの支援も十分でないため、渋々教員となった。

昨年叔母家族がロシアに引っ越したことを機に、叔父の家に移り、叔父の妻とその子供と共に暮らしている。叔父の妻は自身のことを実の娘のように扱ってくれているものの、それでも居心地の悪さは感じている。仕事に関しては、最近では「子供が自分に対して反応をしてくれて、自分を受け入れてくれる」ことから教員の仕事にやりがいを感じるようになっていく。また卒業後の進路として海外留学を検討しているため、大学とは別に英語のクラスへも通い始めた。

価値観について、結婚前は周囲の意見を重視する傾向であったという。結婚期間は希死念慮に苛まれ、「なぜ自分なのか？なぜ結婚しなければならなかったのか？」と過去を恨み、悲観的になって自己嫌悪するような思考に陥っていた。ただ離婚後から現在は、自分自身のことを愛せており、人生を前向きに捉えるようになっていくとの見方であった。B さんが考える「目指すべき女性像」は「自分を好きで、自分の考えを持ち、自立心がある女性」とあり、現在の自分は「人からの評価をあま

り気にしないで強くいられている。結婚していたときより生活も良いし、好きな場所へ行って、好きなものを買って、好きなものを食べることができる」と肯定的に評価した。ただし、ウズベキスタンでは「少し着飾っただけで噂される」ため女性が暮らすのは少し難しいとも考えている。将来については、海外へ移住して勉強し、ウズベキスタン国内の学校ではなく海外の大学でインターナショナルな教員として生きていきたいと語った。

## 考察

### ① TEM 図から見る主体性の表出

今回、結婚歴のある A さんと結婚歴に加え離婚歴もある B さんの 2 例を具体的対象として取り上げ、それぞれの出生から現在に至るまでの人生経路について TEM 図を作成した。そしてそれぞれの主体性の表出に対し SG・SD が与えた影響について分析した。

進学や留学について、SG・SD 共に親族の影響が大きいことが見て取れる。また A さんが持つ「大学を卒業してから結婚すべき」という価値観も意思決定に影響したと思われる。ウズベキスタンの女性には良い嫁の条件として学歴が求められることがあるが<sup>6,10</sup>、A さんのこの価値観はこれを女性自身が内面化した結果形成されたと思われる。また B さんの例で興味深いのは、ロックダウンが進学を断念させる方向へ影響した点である。結果的に彼女は進学したものの、Junussova らが中央アジアにおけるロックダウンの女性の学業への影響を検討したとおり<sup>23</sup>、ウズベキスタンの都市部においても実際に学業に対して悪影響が生じていたことが判明した。

結婚について、A さんは結婚に対して肯定的であり、時期や相手など両親と交渉して望む形で実現させている。また A さんは出産に対しても肯定的で、実家には自身と弟の二人しかいなかったことから自分になるべく多く産む方が良く考えている。この点で、A さんはウズベキスタン社会が女性へ要求する役割を自分のものとしている。他方で B さんは結婚に対して否定的であったが、親族の決定に逆らえず受け入れた。ソ連末期には夫や義母からの暴力、不妊などあらゆる理由から嫁の自殺が多発していたことが明らかとなっているが<sup>24,25</sup>、B さんの結婚生活からは現代においても苦境に立たされた嫁が取る選択肢に自殺が残り続けていることが分かる。

仕事について、夫や親族による介入がありつつも、両者とも教員の仕事に就くことができている。特に B さんには教員である親族の勧めが SG となっていたが、ここには教育の分野は女性のものという性役割<sup>17</sup>も背景にあったと考えられる。

このように、社会的規範や性役割、親族らによる介入といった環境要因によって自身の人生に対し最終的な決定権を持ってないことや受動的に決定を行うことがありつつも、両者とも自身の人生について考え、主体的な存在として行動を選択して生きていることが分かる。A さんの主観では「結婚をすると自由な決断ができなくなる」と感じられているが、TEM 図においてはいずれの例においても結婚前から SG・SD の影響は大きく、未婚 = 自由、結婚 = 自由の制限、ということが絶対的な構造ではないことが読み取れる。むしろ、A さんも B さんも結婚を経た現在は様々な制約がある中でも自分の取

り得る選択を模索し自分の思う人生を歩んでいることから、結婚という社会的義務を果たすことによって得ることのできる自由もあるように見える。そして、このように結婚を通じて女性が主体性を表出する機会が得られるにつれて、後述のような各人が理想とする「目指すべき女性像」にも変容が生じていく

## ② TLMG 図から見る「目指すべき女性像」の変容

結婚および離婚から最終的な等至点までの分岐において、どのような内的変容が生じたかについて TLMG 図から分析した。

Aさんは結婚前の自身について「インディペンデント」と評しているが、退職してから現在にかけて「ユニバーサルな女性」という自己認識を獲得し、これを仕事の再開という形で外在化させている。Aさんは夫が主要なSDとなって行動が制約されており、そのことを多少不満にも感じているが、料理が好きであることや子供は多い方が良いという考えから、家事や育児を前向きにこなしている。この中で、一番下の子どもが幼稚園に入園するという出来事から時間的な余裕ができ、自身の仕事について考え直すきっかけが生じた。この結果、時間を無駄にせず、家事や育児も完璧にこなし、仕事もするという生き方を「目指すべき女性像」と考えるようになり、その理想に合致する自己実現を果たしている。Akiner は独立後のウズベキスタン女性は伝統に従って家庭に回帰することと自立や自由への道を進むことという二つの価値観の狭間にあると指摘しているが<sup>24</sup>、Aさんはこのいずれをも「目指すべき女性像」として設定し、そしてそれを体現している。性規範に忠実である上にそれを肯定的に内在化させ、更に自身のキャリアも諦めない彼女のあり方は、現代ウズベキスタン女性が抱えるジレンマを乗り越える生き方を示している。

Bさんは離婚の経験を通して「周囲の意見をよく聞く」態度から「自分を愛し自分の意見を持つ」生き方に変容している。Bさんは結婚まで親族が主要な決定者として力を持っており、SG・SD いずれも親族に影響をされていた。そのことに不満を持ちつつも、受動的に決定を行っていた。しかし離婚や就職をきっかけとして、自分で人生を決定することや仕事に対して充実感を覚えるようになり、精神的にも経済的にも親族から自立する方向に変化する。また再びの引っ越しという出来事について、そこで快く受け入れてもらえることがむしろ疎外感を引き起こしたため、生活空間的な自立を考えるきっかけとなっている。こうした経緯から、自分の考えを持って行動するということに対して自己肯定ができるようになり、また家を出て自立することや留学へ行くことを具体的な目標として考えられるようになったため、英語の勉強を始めるという決断に至った。彼女は結婚して家庭に入るという規範から逸脱しているが、「目指すべき女性像」には自立を掲げている。彼女の現在の自己評価の基準も規範に忠実であることではなく自立を目指していることに支えられている。海外移住を希望し、ウズベキスタンを女性にとって生きづらい国だとみなす彼女にとって、自立を「目指すべき女性像」に据えるという思想は、規範を顧みないことによって構築されているのではない。むしろ反対に、規範の存在を強く意識し、そして拒否しようという試みによるものと推測される。

### ③個人的な「目指すべき女性像」に影響を与える社会的な「あるべき女性像」

2 人の変容は規範への迎合と規範からの逸脱という一見すると真逆の動きを示しているように見えるものの、両者とも強くそれを意識し、それに対して自分に合ったやり方で対応しようと試みている点で共通である。このことから、家庭が重要であるという規範は依然として強く機能していることが分かる。しかし両者ともフルタイムではない形で仕事をしており、彼女らが考える個人的な「目指すべき女性像」にも仕事や自立を組み込んでいることから、専業主婦を最善とする考えは持っていないことも分かる。これらのことから、家庭か仕事かの二者択一ではなく家庭も仕事も両方という生き方が、個々人の「目指すべき女性像」レベルではなく、社会的な「あるべき女性像」として醸成されてきているのではないかと考察する。ウズベキスタンの女性が家事と労働の二重負担を強いられていること<sup>25,26</sup>は先行研究で指摘されているが、これは負担であると同時に、「家庭もキャリアも諦めない」という現代の女性のロールモデルとして、前向きに受け入れられているように思われる。

## 結論

本研究では結婚経験者 A さんと離婚経験者 B さんの 2 例を具体的事象として取り上げ、彼女らの考える「目指すべき女性像」の変容を分析した。この結果、まず現代ウズベキスタン女性は社会規範や親族の影響を受けながらも主体性を表出しようとしていることが分かった。そして、結婚や離婚といった人生の局面のなかで主体的な選択をとってきたことで、家事と仕事の両立や自立をそれぞれが「目指すべき女性像」として獲得していたことも明らかになった。このことから、家庭も仕事もどちらも前向きにこなす女性を「あるべき女性像」とみなす新たな社会的規範が醸成されてきたのではないかと推測される。今回の研究では事例も少なく個別事例への言及に留まるが、対象者数やインタビュー回数を増やし、さらなる研究を続けたい。

表 対象者 2 名のプロフィール

対象者	年齢	学歴	結婚歴	出産歴	同居家族の構成
A さん	30 歳代前半	大学卒業	あり、継続中	あり	義両親、夫、実子
B さん	20 歳代前半	大学在学中	結婚後に離婚	なし	叔父の妻、その子供

図 1 A さんの TEM 図

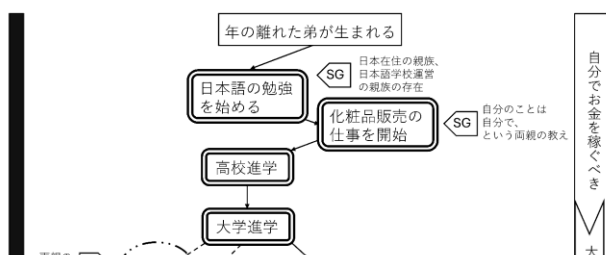


図 2 B さんの TEM 図

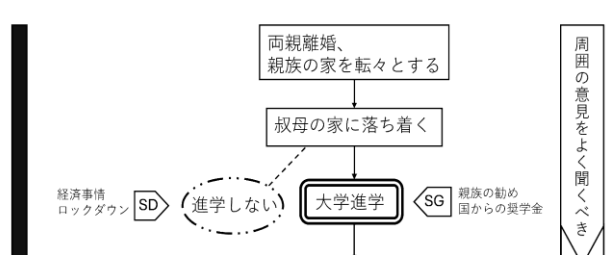
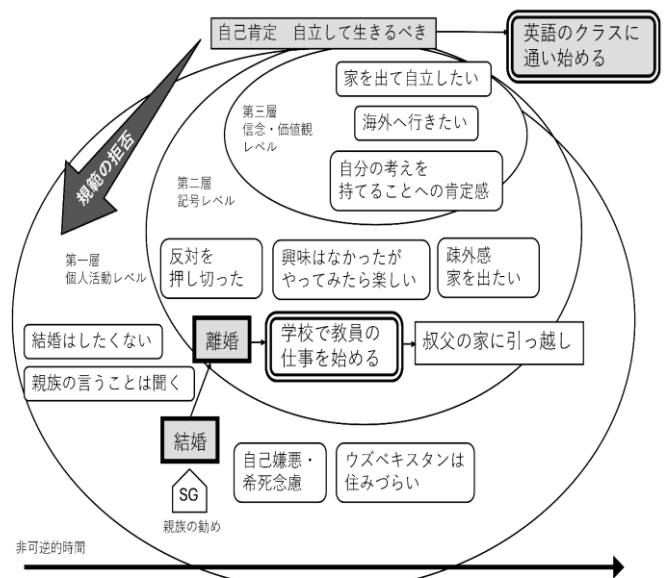
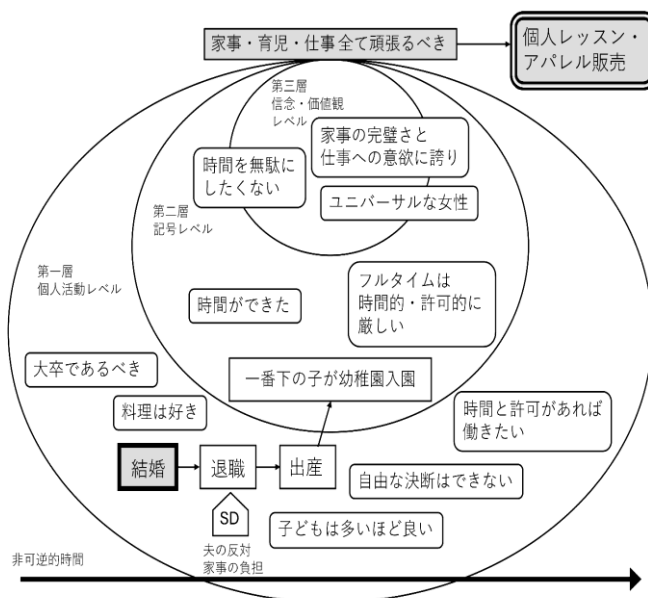


図 3 Aさんの TLMG 図

図 4 Bさんの TLMG 図

図 3 Aさんの TLMG 図

図 4 Bさんの TLMG 図



## 引用

1. 菊田悠「ウズベキスタンのマハツラにおける経済・社会変化とイスラーム」藤本透子（編）『現代アジアの宗教』春風社、
14. ダダバエフ・ティムール『マハツラの実像—中央アジア社会の伝統と変容』東京大学東洋文化研究所、2006。
15. Kamp, M. “Gender Ideals and Income Realities:

- 2015、35-76 頁。
2. 和崎聖日「旧ソ連・ウズベキスタンにおける『婚外の性』とイスラーム：男が語るモラル」高尾賢一郎、後藤絵美、小柳敦史（編）『宗教と風紀：〈聖なる規範〉から読み解く現代』岩波書店、2021a、197-219 頁。
  3. Kikuta, H. "Mobile Phones and Self-Determination among Muslim Youth in Uzbekistan," *Central Asian Survey*, 38(2), 2019, pp.181-196.
  4. 宗野ふもと「<フィールドワーク便り>「電話彼氏」を婿にする：ウズベキスタンの結婚事情」『アジア・アフリカ地域研究』12(1)、2012、133-136 頁。
  5. 菊田悠「労働移民の社会的影響：移動と送金をもたらす変化」宇山智彦他（編）『現代中央アジア：政治・経済・社会』日本評論社、2018、257-279 頁。
  6. Azimova, N; Karimova, S. "Modern Uzbek Family and Marital Relations: A Case Study on Mindon Village, Ferghana Province," *CIRAS discussion paper No.69：社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族 1*, 69, 2017, pp 45-55.
  7. 菊田悠「ウズベキスタンの拡大家族主義：高出生率を支える収入とケア確保の実態とイデオロギー」『北海学園大学学園論集』193、2024、53-72 頁。
  8. 和崎聖日「揺れ動くジェンダー規範：旧ソ連中央アジアにおける世俗主義とイスラーム化」田中雅一、嶺崎寛子（編）『ジェンダー暴力の文化人類学：家族・国家・ディアスポラ社会』昭和堂、2021b、179-197 頁。
  9. Ilkhamov, A. "Labour migration and the ritual economy of the Uzbek extended family," *Zeitschrift für Ethnologie*, 2013, pp. 259-284.
  10. Turaeva, R. "Gender and changing women's roles in Uzbekistan: from Soviet workers to post-Soviet entrepreneurs," *Constructing the Uzbek state: narratives of post-Soviet years*, 2017, pp.303-318.
  11. ダダバエフ・ティムール『社会主義後のウズベキスタンー変わる国と揺れる人々の心』アジア経済研究所、2008。
  12. 和崎聖日「中央アジア定住ムスリムの婚姻と離婚」藤本透子（編）『現代アジアの宗教』春風社、2015、77-129 頁。
  13. Kamp, M. "Between women and the state: mahalla committees and social welfare in Uzbekistan," Pauline Jones Luong (ed.), *The Transformation of Central Asia: States and Societies from Soviet Rule to Independence*, 2004, pp. 29-58.
  14. Discourses about Labor and Gender in Uzbekistan," *Nationalities Papers*, 33(3), 2005, pp. 403-422.
  15. 宗野ふもと「合い間の仕事としての手織り物生産ーウズベキスタンにおける社会変容と女性ー」『アジア・アフリカ地域研究』13(2)、2014、212-248 頁。
  16. 山名田静「ウズベキスタンの高等教育における女性の困難：当事者の語りに着目して」『北星学園大学大学院論集』12、2021、1-20 頁。
  17. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編『TEA 理論編：複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社、2015。
  18. 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25、2012、95-107 頁。
  19. 研究活動推進委員会「2023 年度日本地域看護学会研究セミナー：複線径路等至性アプローチ（TEA）とモデリング（TEM）の理論と実際を学ぶ」『日本地域看護学会誌』27(2)、2024、31-48 頁。
  20. 田垣正晋「こころの測り方：複線径路等至性アプローチとは」『心理学ワールド』93、2021、34-35 頁。
  21. O'zbekiston Respublikasi Prezidenti huzuridagi Statistika agentligi, "Oliy ta'lim," 2024, <<https://stat.uz/uz/rasmiy-statistika/social-protection-2>>, accessed 2025-2-18.
  22. Junussova, M, et al. "Gendered Impact of the COVID-19 Pandemic on Food Security, Agricultural Production, Income and Family Relations in Rural Areas of Kyrgyzstan, Tajikistan and Uzbekistan," *Working Paper*, 76, 2024.
  23. Akiner, S. "Between tradition and modernity: the dilemma facing contemporary Central Asian women," Buckley M (ed.), *Post-Soviet Women: From the Baltic to Central Asia*, 1997, pp. 261-304.
  24. Olcott, M. B. 1991. "Women and Society in Central Asia," W Fierman (ed.), *Soviet Central Asia: The Failed Transformation*, Boulder, 1, 1991, pp. 235-254.
  25. 五十嵐徳子「旧ソ連の共和国で大量の専業主婦は誕生するのか」『比較経済研究』46、2009、17-34 頁。

## 参考文献

- 宗野ふもと「現代中央アジアにおける女性の仕事：ウズベキスタン、ホラズム州ヒヴァ市の絨毯工房を取り上げて」『Kyoto Working Papers on Area Studies: G-COE Series』55、2009、1-69 頁。
- 中野祥子「在日ムスリム留学生の ヒジャーブ着脱行為をめぐる価値の変容過程：TEA による 3 名の事例分析」『TEA と質的探究』1(1)、2023、33-54 頁。

